

レクチャー採録

猿翁アーカイブにみる三代目市川猿之助の世界

第八回フォーラム

三代目猿之助の〈離見の見〉

三代目猿之助（二代目猿翁）が京都芸術大学に寄贈した貴重な歌舞伎関係資料をもとに三代目猿之助の軌跡をたどるフォーラム。第八回は2023年9月に春秋座（京都芸術劇場）にて開催。ここではその講義を採録する。

〈企画者のことば〉

三代目猿之助の〈離見の見〉

私は普通の人が追わぬものを必死に追いかけてきたような気がする。それは何か、よく分からぬ。何か途方もない大きなものを追いつめて、私の心は絶えず天高く天翔けていた。天翔ける心、それが私だ。

スーパー歌舞伎『ヤマトタケル』のヤマトタケルのせりふである。劇中のヤマトタケルと猿之助自身がシンクロするこのせりふは、「天翔ける心」を『ヤマトタケル』のテーマとして明確化することに成功した。そして、「何か途方もない大きなもの」を追い求めて創造した猿之助のスーパー歌舞伎は演劇史に新たな一ページを刻んだ。

しかし、やみくもに「何か途方もない大きなもの」を追い求めてきたわけではない。

1977年に猿之助は史上最年少で責任ある立場、一枚看板の座頭として海外歌舞伎公演に臨み、1981年、

1983年と立て続けにアメリカ、ヨーロッパを駆け巡った。

ニューヨーク、ワシントン、シカゴ、モントリオール、オタワ、ベルリン、パリ、ミラノ、ポロニア、レッジョ・エミリア、ロンドン、ウィーンと各都市における観客席からの反応は、三十代の猿之助にとって大なる刺激となったことはいままでもない。

猿之助は海外の舞台に立つことで多くの収穫を得た。

1 テンポアップの必要性

2 ドラマ性のある作品の上演

3 上演時間の短縮

いずれも、こんにちの歌舞伎がかかえる課題であり、求められているものばかりである。50年も以前にすでに猿之助の視野にあったことが知られる。

歌舞伎になじみのない大衆にいかにもしろくみてもらうか。そういう意識を持つ感覚を海外で学んだ。外から内をみる、猿之助の〈離見の見〉の開眼である。

第八回となる今回は、「三代目猿之助の〈離見の見〉」をテーマに、観客を意識しながら時代に応じて歌舞伎を革新し続けた「猿之助歌舞伎」の舞台世界をひも解いてみたい。

田口章子（企画／京都芸術大学教授）

三代目市川猿之助（二代目市川猿翁）

1939（昭和14）年生まれ。つねに「時代とともに生きる歌舞伎」をめざし、伝統の継承と創造に全身全霊をかけて走り続けている。「猿翁十種」をはじめとする家の芸の継承はもとより、『義経千本桜』『加賀見山再岩藤』などの古典歌舞伎の再創造、『菊宴月白浪』『競伊勢物語』などの古劇の復活、さらには『ヤマトタ

歌舞伎のエネルギーに生きる猿翁さんの魅力

岡崎哲也

私は1984（昭和59）年4月に松竹株式会社に入りまして、最初の仕事はその年の7月の歌舞伎座。猿翁さんのお仕事でした。ですので来年は猿翁さんと仕事をはじめて4年だったのでありますが突然、旅立たれてしまい、とても残念でございます。

猿翁さんは天下第一の花形役者で素晴らしい舞台を作り続けた人気俳優ですが、演出家としての猿翁さんは、ご自分が出ている作品のあらゆるスタッフ、周りの方に面白くないところはないか、取った方がいいところはないかと聞き、さらに芝居をしている間にも次の作品のことを考えていたという方でございます。

これからご覧いただく『牡丹景清』は私が初めてお芝居作りに参加した思い出の興行でございます。元々は明治から大正時代まで愛知県の刈谷を本拠として活躍した嵐鱗花あらしりんかという親方による旅一座、「鱗花芝居」のレパートリーで

ケル』や『新・三国志』シリーズなどのスーパー歌舞伎の創造まで、パワフルな活動はみごとに芸術的完成を見せる。現代歌舞伎に多彩で豊穡な成果をもたらしてきた演劇活動の中から「三代猿之助四十八撰」を制定した。歌舞伎にかける熱い思いと革新的な発想は、三代目市川猿之助が育てた弟子たちにも確実に受け継がれている。2012（平成24）年新橋演舞場において、祖父が名乗った猿翁の名を二代目として襲名した。京都芸術大学では、平成5年に芸術学部教授、2000～2005（平成12～17）年副学長に就任。集中講義では学生に歌舞伎の実技実演指導も行った。同大の春秋座には徳山詳直前理事長とともに劇場の構想・設計から関わる。初代芸術監督として、柿落し公演の『日本振袖始』はじめ、数々の舞台を企画し出演した。

した。猿翁さんは芝居の情熱というのは庶民のエネルギーにあると、岐阜で地芝居をされている松本團升さんの元へ地芝居の型などを習いに行っておられました。ある時、地芝居に伝わっていた台本が手に入り、団升さんと相談して歌舞伎座でやってみようと、四代目市川段四郎さんを中心として上演したのが、こちらでございます。

【映像】「景清と三保谷が牡丹の花を手に順番に踊る」

悪七兵衛景清は段四郎さん、島人重作実は秩父庄司重忠は五代目中村歌六さん、三保谷四郎国俊三代目中村歌昇（現在、又五郎）さんです。牡丹の花が乱れ咲く日向嶋にいる景清の元に重忠が訪れ、懐柔して頼朝方に付けようとしていきます。

『義経千本桜』の「吉野山」の道行きで、忠信と静御前が鍛引（屋島の合戦で、悪七兵衛景清と三保谷四郎が力を競い合った際、景清が兜の鍔を引きちぎったという伝説）の「軍物語」を踊る場面がありますが、ここでは実際に三保谷が登場し、景清と「軍物語」を踊ります。義太夫の文句は「吉野山」と同じで、語っているのは若き日の葵太夫さんです。

ここに亀治郎時代の四代目が扮する景清の娘・人丸が出てまいります。実は人丸を枷に景清を源氏方に取り入れようという重忠の思惑です。この節は『奥州安達原』三段目の安倍貞任と娘・お君の場面と全く同じものがございます。最初、はるばるの会に来た人丸に親子と名乗らなかつた景清も、娘にすがりつかれてホロリとくるところです。いかにも地芝居の感じが出ていますね。

鱗花一座のお弟子さんたちは普段は農業に従事していて、旅は畑仕事がない時にいたします。ですから非常に味付けの濃い、英語でいうとアーシー（earthy）な歌舞伎でございます。それを初めて歌舞伎座でやったというのが、いかにも猿翁さんらしいですね。

続いて重忠と三保谷が踊りますが、これは『奥州安達原』三段目の宗任と貞任の振りと同じです。江戸時代から大正時代まで地方のお客様はこういう節をよくご存知でしたし、派手なので好まれたようですね。踊り終えて四人が決まります。景清と重忠が一礼し、景清と人丸が土手に上がり、再び四人で決まると幕でございませぬ。

地芝居の『源平咲分牡丹』には先ほどの軍物語は入っておりませんが、猿翁さんが歌舞伎座で上演するには少し物足りないと感じられました。

最初はご自分も出ようかと思われたのですが、昼の部は他に『蚤取男』、『金幣猿島郡』、夜の部は『極付獨道中五十二駅』と出ずっぱりですので、序幕の『牡丹景清』は演出家として勤められました。

続いてご覧いただくのは、同じ年の1984（昭和59）年10年、『菊宴月白浪』です。『四谷怪談』などを書いた四世鶴屋南北、通称・大南北が三代目菊五郎のために作った『忠臣蔵』のパロディです。主人公は『忠臣蔵』では悪役として登場する斧定九郎。実は義士で、斧親子は忠義者だったという話です。討ち入りが上手だったので斧親子の出る幕はありませんでしたが、もし討ち入りが上手いかなかったら、自分たちで46人集めて再び討ち入りをする予定だったという南北らしい発想のお芝居でございませぬ。

そもそも斧定九郎が良い人だったというのが南北らしいですが、なぜこのような良い男になったかということ、例の初代・中村仲蔵が定九郎をやったのが1780年代、天明の頃でございませぬ。このお芝居が作られたのは、それから2、30年後ですから、定九郎はすっかり二枚目がやる役になっているんですね。その定九郎が鉄砲に打たれて死んでおらず、後日譚の主人公にしたのが南北と三代目菊五郎の知恵でございませぬ。

新たな台本は松竹の常務を勤められた奈河彰輔さんが猿翁さんと一緒にお書きになりました。全部上演すると7、8時間かかる芝居を5時間に短くしています。それでも初日は22時50分ぐらいまでかかりました。ですが、お客さん

は帰らなかったですね。いい時代です。とはいえ毎日、終わるのは22時15分ぐらいでした。今では考えられないことですね。先日、中車さんが再演された時は石川耕士先生が随分、短くしてくださいました。

この舞台の前の月は京都南座で猿之助のすべて（1987（昭和62）年9月「市川猿之助奮闘 九月大歌舞伎」）という昼夜出ずっぱりの興行がありました。そのため『菊宴月白浪』の稽古は舞台が終わった後、八坂神社様と安井金毘羅宮様の社務所を借りて約2週間稽古をいたしました。全出演者、地方さんまで全員、22時から翌朝2時まで稽古をいたしました。当時、返し忘れてしまった出前のメニューを今だに持っています。夜中にうどんやお蕎麦、トーストを持ってきてくれるお店があったんですね。

【映像】『菊宴月白浪』「忠臣蔵後日譚（甘繩禪覚寺塩谷判官墓前）」

花道から黒紋付きに浪人笠、手桶を持った猿翁さんの斧定九郎が登場しました。討ち入りから一年半たち、高輪泉岳寺、芝居では甘繩禪覚寺と申しますが、そこにある四十七士の墓参りにやってきました。花道の七三で笠を取ると拍手がおこりましたね。

墓参りをしている定九郎のところに高野家と塩治家を再興させるという話が届きます。その条件として高野の家にある家宝・菅家の正筆、塩治家の家宝・花筐の短刀を献上するということになります。

【映像】「伊皿子町斧九郎兵衛閑居」

少し映像を飛ばします。ここは定九郎と父・九郎兵衛が住んでいる家です。定九郎は白装束で座っております。塩治判官の弟・縫之助が家宝の短刀を紛失してしまい、その身代わりとして定九郎が切腹をするという芝居をしているところです。定九郎が腹を切ると思ったら上使に來ている高野の侍を切り、意外な展開になります。

【映像】「定九郎が上使を切り、刀を右胸元に構えて見得をする。その後、庭の蜂の巣に向かって刀を投げると巻物が落ちてくる」

なんと蜂の巣に忍術秘法を記した小野家の家宝のいちかん一卷が隠してあり、見つけるといふ、バカバカしいといえバカバカしい話になります。

この一卷は持っているとは叶うというもので、後にあっちに行ったり、こっちへ行ったり、敵の方へ渡ったりもいたします。

実は高野、塩治両家の宝物は二つとも行方不明になっています。定九郎は両方とも高野家へ取られてしまっていると考えています。というのも高野家は山名という家が後見人となっており、その山名の倅が高野の家に養子に行っております。そのことから山名館という所に二つの宝があると思っっているわけです。そして山名館へ忍び込むのには、この忍術の一卷が必要だったというわけです。

当時、私は澤瀉屋さんに突然、呼ばれまして「2、3日のうちに宝物二つと巻き物が誰の手に、どこの場でどう渡るかフローチャートを作ってください」と言われました。私が最初に命じられた仕事がそれでした。2、3日と言われましたが、私も生意気ですから徹夜をして翌日までに作っていきましたら、「あんた好きだね」とこう言っていたしまして、それから係になったようです。

【映像】「斧九郎兵衛が話し始める」

さて、定九郎は親に切腹をしろと言います。お客さんから笑いが出ましたね。この辺、実に南北は飛んでいますよね。実はお父さんは討ち入りに出られなかったことから、端から腹を切るつもりでいたのです。ですが、なんとなく1年半経ってしまったという真相を明かしているところでございます。今、猿翁さんがご覧になったら「この場面は長いね」とおっしゃるでしょうね。

父・九郎兵衛を演じていらっしやるのは三代目河原崎権十郎さんですが、猿翁さんは権十郎さんをととも慕っていらして、『河内山』や『実盛物語』は山崎屋さんから丁寧にご伝授を受けていました。

さて、お父さんは腹を切つて果てます。そして例の忍術の一卷が手に入ったので山名館に二つのお宝を盗み取るために夜討ちに入るのでございます。

【映像】「山名の殿様が持った槍に火が付き、衝立に火が移る」

この場面はスーパースペクタクルで、猿翁さんはこれをなさりながら毎日、後のスーパースペクタクルに使うような大仕掛けの舞台転換をお考えになっていました。これは本火なので本当に怖かったです。無事にひと月終わりました。火が付いた衝立の後ろから定九郎がセリ上がります。定九郎が着ている半纏の袖口には、『忠臣蔵』で討ち入りの時に義士が着ている半纏と同じ「雁木」がデザインされています。定九郎と山名のお殿様と打ち合います。この山名のお殿様は亡くなられた六代目片岡芦燕さんです。定九郎がお殿様の腰に付いている錦の袋を奪い、刺し殺しました。袋の中には高野家のお宝「菅家の正筆」が入っておりまして、これでお宝ゲットでございますね。

【映像】「定九郎は一卷を改め、再び丁寧に巻き戻して錦の布に包む」

澤瀉屋は本当に芝居が丁寧な方ですね。

【映像】「定九郎の手下たちが花筐の短刀を探している」

屋敷にあると思っていた短刀がない。どうやら別のところにあるらしいとなります。まずは正筆が手に入ったので、先に味方を全員逃がし、一人残つて敵と立ち回りをします。これからちぎっては投げ、ちぎっては投げの大立ち回りになるのですが、この場面が大変、難儀いたしました。相手方の侍の刀が全部、仕掛け物になっていまして、忍術で火が付くのです。

【映像】「一卷を啜えた定九郎が、敵の刀を指をさすと火が付く」

この仕掛けは小道具さんが大変、苦勞して特殊技術のアトリエ・カオスさんと一緒に作りました。今日は割と全部の刀に火が付いていますね。ですが点かない日があるんですよ。そうすると澤瀉屋は大変なおかんむりで、幕間に呼

ばれて「今日はなんなの。打率4割じゃない。火が点かないと僕が馬鹿に見えるから、困るんだよ」とご機嫌が悪かったですね。

【映像】「敵が倒れている中、スモークが出て、定九郎がセリ下がる」

スモークが出まして、お屋敷が屋台崩し（舞台の建物が崩れたり倒れたりする仕掛け）になります。歌舞伎座で古典の芝居を行う場合、お屋敷の高さは12尺なのですが、この時は20尺もあります。非常にタツバが高いですね。これは前の歌舞伎座ですからできたんですね。しかし道具を飾ったお屋敷を屋台崩しするのは本当に大変で、大道具さんがなんとかやってくれました。

【映像】「屋敷に火が回り、敵が逃げ惑う」

お屋敷が火事になります。後のスーパー歌舞伎の火事の場合はこれをなさりながら、どのくらい効果的に演出できるかを演出家の目で、離見の見でご覧になっていたのだと思います。

もう本火は使えませんが照明と音を凝らし、火が燃えているように工夫しました。ちゃんと燃えているように見えると言われましたので、初めてやったにしては上出来だったと思います。

館がガタガタ壊れてまいりました。この後、定九郎が花道の七三からセリ上がるのですが、その時間稼ぎのためにも舞台では派手に屋台崩しをしたり、逃げまどったりしています。こういうのも全て、何秒かかるか計ってくれと言われましたね。

【映像】「七三のセリから定九郎が登場する」

拵こしらえが盗賊のものに変わっております。澤瀉屋は幕外が大好きでございますので、たっぷりいたします。傘を持った若い者二人との絡みがかかり、開いた傘の後ろで拵え替えをしています。

付け打ちのバタバタという音が入りまして、いつもの『忠臣蔵』五段目、山崎街道の斧定九郎の姿―黒紋付に白献

上の帯、尻からげをした姿になります。そして花道を通って幕となります。初代仲蔵が作った五段目の定九郎のなりで花道を入る幕切れですが、澤瀉屋はとて面白い気持ちで芝居ができるとおっしゃっていました。その代わり、「その前が、ごちやごちやつとしてないとダメだからね」ともおっしゃっていました。猿翁さんはいわゆる、安っぽいという意味の「ちやち「なものがお嫌いなんですよね。「かけるところはお金をかけてくれ」とおっしゃるわけです。ですから猿翁さんはいつも「ちやち郎兵衛では困るからさ」とおっしゃっていました。

【映像】「両国柳橋」

続いて両国柳橋の場でございます。この場面の前に、定九郎に仕えていた下部与五郎が、実は敵方の高野師直の落胤ということが分かり、与五郎は定九郎の女房・加古川を殺し、塩谷家のお宝・花筐の短刀を奪うというくだりがございます。

そうとは知らない定九郎が8月の花火の日に隅田川のほとりにやってきました。女房も行方不明になり、相変わらず刀の行方も分らない。どうしようかというところでは。

花火が上がります。ゴーンと鐘が鳴り、ヒュードドドドという陰囃子が鳴ります。ここに人魂と共に先代の門之助さん扮する加古川の幽霊が登場します。定九郎は女房が殺されたことを知りませんので、なんだか気持ち悪いなと思っ

ているところでは。人魂のことを歌舞伎用語で「焼酎火」と申しますが、とにかく澤瀉屋の芝居は本火が多いんです。もちろん全部、事前に消防署へお届けして許可を取りますが、やはり本当の火を使いますので都度、苦勞がござい

ます。

加古川の霊が消え、定九郎は今の幽霊が女房だと気が付きます。そこに雨が降ってきて、今の右團次さんの角兵衛獅子が登場します。これは「忠臣蔵」五段目のイノシシのパロディですね。そこへパンツ！と音が鳴り花火が上がります。これは勘平が打つ鉄砲の音を利かせているんですね。南北の趣向です。

再び綺麗な加古川が出てきたと思つたら、また消えて火花が上がります。今ではプロジェクションマッピングなど、いろいろな電飾機材がごじりますが、当時は豆電球みtainので作るのです、この火花も随分苦勞しました。当時としてはよくできていると思います。また加古川の幽霊が焼酎火と共に現れ、消えます。

今度は火花が上がる中、下手から上手へと綺麗な加古川が宙乗りいたします。『加賀見山再岩藤』のように、屋台中の宙乗りというのは江戸の昔からありますが、この後が面白いです。加古川が上手に行つて消えました。再び上手側から加古川が出てきます。これは1、2サイズ小さい加古川なんです。いわゆる「遠見（遠近法）」でございますね。熊谷、敦盛の『一谷嫩軍記陣門・組打』の中で遠見といつて子役さんがやる場面がありますね。この加古川は当時の亀治郎さん、今の四代目さんです。そして定九郎の後ろを通りすぎ、定九郎の見得で決まると幕になります。

これは本を作る打ち合わせをしている時に、突然、「遠見にしよう。亀がいるから亀にさせよう」と言つていとも簡単に決まつてしまいました。演出家としての猿翁さんはずっと打ち合わせをしている中で、そういうことをふつとお考へになるんですよ。

ここで少し、こぼれ話をいたしますと、小さい加古川の霊が来て、柝が入りますね。ある日、大道具が最初のチョンで（澤瀉屋が見得をする前に）幕にしちゃったんです。私は一階の一番後ろにある監事室にいたのですが、これは大変だ！ どうやって謝つても収まらないだろう。私は演出助手という肩書きで芝居の2週間の稽古にも付き合っていますが、私はまだ入社6か月目でして、支配人に一緒に謝りに行つてもらおうか、制作の役員と一緒に行ってもらうかと考えました。まず大道具の責任ではありますが、全て私どもの責任です。

しかも「違う違う」といつて閉めた幕を再び開けて、また閉めたんです。だから非常にみつともないことになつてしまいました、「僕の芝居をなんだと思つているんだ」とお怒りは二乗、三乗でございました。次の幕まで20分ぐら

いの幕間があるのですが拵え変えをする間、ずっと怒っておられました。いや、この時は怒りましたね。

【映像】「専蔵寺大屋根」

大詰めをご覧いただきましょう。いよいよ定九郎と敵になった与五郎が専蔵寺の屋根の上で一騎打ちとなります。定九郎は凧に乗った宙乗りで上がり、再び下りてくるんですね。宙乗りの行って来い、ダブルヘッダーというのを初めていたしました。途中で凧がポンツと外れて、落ちるような仕掛けをいたしました。そうするとお客さんは宙乗りが壊れたんじゃないかと思って、わっと驚くんですよ。実は体にワイヤーを付けていて定九郎は傘を広げて降りてきます。着地する場所を我々はよく船付き場とよく言っていました。特設の着地場を作りました。

これから後は、ただご覧ください。5時間、芝居した後の大立ち回りでございます。与五郎の手に忍術の一卷が渡ってしまっているので忍術を使われています。今度は専蔵寺も屋台崩しになります。切りかかってくる和五郎に定九郎が瓦を投げます。この瓦も色々作りまして、ウレタンと発泡スチロールを足したようなものですが、よく飛びますね。蹴るは投げるわけで、もう最高ですね。客席にもよく飛びまして毎日2、30枚回収しました。

【映像】「定九郎が瓦を叩くと火が出る」

あ、今日は外しちゃいましたね。火が出るのがちょっと遅かったですね。これも「なんでポンと瓦を打った時に火が出ない」とうるさいんですね。反対側の瓦を叩くと鳩が3羽飛び出しました。この鳩は湘南動物という動物プロダクションから借りまして、毎日、テグスを付けて飛ばすんです。夜の22時を回っておりますから鳩も大変ですよ。定九郎が棒を投げると、与五郎が持っていた一卷が落ちて術が溶け、定九郎が反撃します。そこに9代目澤村宗十郎さんの女達金笄のおかるが登場し、与五郎に切りかかります。

【映像】「定九郎が与五郎を押さえつけ、おかるが刺して決まる」

大団円でございますね。

【映像】「屋根の上に捕り手がズラリと並び、その前に定九郎を真ん中に三人が決まる」

後ろには捕り手が大勢出まして「御用」と書いた提灯を持っています。この提灯にご注目を。定九郎の「まず本日はこれぎり」という切り口上になると提灯がぐるりと回って、一文字づつ「あ」「り」「が」「と」「う」「ご」「ぎ」「い」「ま」「し」「た」「又」「の」「御」「来」「場」「を」「お」「待」「ち」「し」「て」「お」「り」「ま」「す」と変わります。この字の数だけ捕り手を出してくれというんで、急遽、剣友会の方にお願ひしました。本当に渾身の舞台でございました。

また、こぼれ話をいたしますと、先ほど鳩が3羽出ましたでしょ。あれも執念の3羽なんです。場所が浅草寺（専蔵寺）だから幕切れに20数羽の鳩を放ってくれと言うわけです。それで湘南動物プロダクション様から鳩を20数羽を借りてきました。その鳩にテグスを付けて舞台稽古で放った瞬間、バタバターと飛んだのはいいのですが、全鳩が組んず解れつになりました。鳩もびっくりしたと思いますよ。籠に入れられ、歌舞伎座の奥で随分待たされましたからね。たまに糸が切れて屋根裏に入っちゃったりしましたね。さすがに鳩ですから言うことを聞いてくれないんです。

それで私と今、歌舞伎座の社長をなさっている先輩の安孫子プロデューサーとみんなで朝の4時ぐらいでしたが、「澤瀉屋さん、ここまでやっていただいて申し訳ないのですが、最後がぐちゃぐちゃになるとお客様に申し訳ないので、鳩だけのご勘弁いただけませんか」と言ったら「しょうがないね。じゃあさ捕り手の「御用」をこうやって」と先ほどの仕掛けを言われました。最初、澤瀉屋は御用提灯だけにするつもりだったんですね。ですがその晩、小道具さんとボタンを押すと提灯がぐるっと回ると言う仕掛けを作りました。

そうしたら澤瀉屋が一言ですよ。「みんな僕のことを聞くのにさ、鳩だけなんぞ言うことを聞かないのかな」。これ、名言ですよ（笑）。しかも、しみじみ僕の目を見て「安い鳩を買ってきちゃったんじゃないの？鳩にもお金をかけなきゃダメだよ、岡崎さん」って言われましたね（笑）。ですが、そのくらいの太い神経でないと歌舞伎座の

座頭はできないと思いました。映像を観ながら、このエピソードを思いました。ほんとに懐かしい。約40年前の話で、しかも入社半年の僕がなんでこんなところに居られたのか。ほんとに幸せですね。

最後は、私が演出家としての猿翁さんの作品の中でも忘れられない舞台です。後に奥様になられる藤間紫さんが主演された『西太后』をご覧いただきます。これは亡くなった永山会長の肝入りで、1995（平成7）年に松竹100年記念としてやるうということになった作品です。猿翁さんが中国清朝の最後の、悪女とも烈女とも言われている大女帝・西太后の生涯を藤間紫さんでやるうと言われました。菱沼彬晃さんという中国文学の専門家にお調べいただいたら、河北省の承德に清朝の皇帝が避暑に行く「避暑山荘」という世界遺産になっている離宮があります。そこで西太后が天下を取るまでのテレビドラマがあり（孫徳民さんが若き日の西太后をモデルに書いた『懿貴妃』）その後の二幕、三幕を新しく孫徳民さんに書いていただきました。これは演出家としての猿翁さんの目です。

【映像】「序幕」

ご観いただいているのは西太后が実権を握るまでを描いた序幕の最後、西太后の反対者である四代目市川段四郎さんが演じる肅順が処刑されてしまう場面です。この作品には歌舞伎、新派、新劇、小劇場演劇、新喜劇が総出でいました。脚本を書かれたのは石川耕士先生でございます。後には歌舞伎の皆さんだけで猿翁さん、紫さんとでなさいました。これは私が大好きな芝居です。紫さんがいらつしやらないから、なかなか上演できないのですが、ぜひもう一度やってみたいと思います。最後はツケの打ち上げで、引っ張りの見得（複数の登場人物が一枚の絵になるように見得をし、同時に極まる）になります。

【映像】「西太后が李蓮英に話している」

皇帝との間にできた子供（皇太子）が夜の悪い遊びをして病気をもらってしまい、余命幾許もないと分かった

場面です。

石川先生のお書きになった脚本は本当に真山青果まやませいこに通ずる史劇として骨の太い本です。李蓮英りれんえい（西太后に半世紀以上仕えた宦官）は風間杜夫さんがお勤めになっています。西太后は皇太子を看病してもせんないことだ。「まだまだ歩み続けねばならない」と泣きながら言い、パツと気を変えて花道に入ります。ここを観て猿翁さんは「紫さんは歌舞伎ができる唯一の女優だ」といつも言っておられました。これは紫さんしかできない。そういう気持ちで石川耕士先生も本を書いてくださり、澤瀉屋も演出をされました。非常に長い芝居ですが実に深くいい話です。

【映像】「西太后と李蓮英が二人きりで話す」

次の場面です。次々と政敵を毒殺し、西太后がさらに次を行くしかないと政治的野望に燃えるところでございます。行く手を遮るものは許さぬと先帝の第一王妃、東の方（東太后）を毒殺しようと言います。（ドラマティックな）音楽は全部、加藤和彦先生が作ってくださいました。

【映像】「赤い布を使い西太后と李蓮英の背景が燃えるような演出になる」

布一枚と照明で燃えるような演出をされています。布の素材、明かりの当たり方だけで幕が切れるほどの効果が得られています。これは猿翁さんが常に考えておられることですね。

『菊宴月白浪』の山名館が1984（昭和59）年、「ヤマトタケル」の初演が先ほど石川先生がおっしゃいましたが、1986（昭和61）年ですから、猿翁さんは、こういった舞台手法を完全に手の内に納めておられました。

【映像】

それでは最後の場面、故宮の太和殿たいわてんの場面です。舞台装置は亡くなられた金井大道具の金井俊一郎会長、当時社長さんご子息の勇一郎君と作ったものです。大道具の一番後ろの大和殿を描いた特殊な絨毯のような幕は、ウィーン・ハンス・シャーヴァアノッホさんという舞台美術家の工房に特注しました。

澤瀉屋さんは1980年代にヴォルフガング・サヴァリツシユさんという指揮者の方からのリクエストで、リヒャルト・シュトラウスのオペラ『影のない女』をミュンヘンで演出されました。10年ほど前まで上演されていました。東京でも名古屋でも上演されました。そのご縁でオペラの方々と国際的なネットワークがあったんですね。この幕は非常に高かったのですが、ここまで来るとこちらも後には引けませんのですね。また「ちやち郎兵衛なら困る」と言われてしまいますからね（笑）。

さて西太后の後ろに、西太后のために死んでいった、あるいは西太后に関わった人が一人づつサスライトに照らされ浮かび上がります。この舞台に出られた俳優さんは風間杜夫さんの他に村井国夫さん、中村歌六さん、内田朝雄さん、篠井英介さん、菅原謙次さん、新喜劇の小島慶四郎さん、市川猿弥さん、そして東太后に小山明子さんという大変贅沢な顔ぶれでした。

ラストは石川先生がお書きになった西太后の名台詞を言い切って、ぐつと下から上へ睨み、一段、一段、玉座に向かって黄金の階段を上っています。そして李蓮英を横に置いて、玉座に座り『毛剃けぞり』の毛剃けぞり九右衛門くゑもんがいたしますような汐見の見得のような大きな見得で決まって緞帳が降りるということでございます。

『西太后』は猿翁さんの主演作ではないですが「猿之助四十八撰」の特別編としてノミネートしたいぐらいの力作であったと思います。

猿翁さんは、とにかく常にエネルギー。考えに考えるけれど、先ほど石川先生がおっしゃったように芝居を始めたなら、お客様をなんとしてもこっちへ巻き込むという情熱。本当にコンピューター付きの人間発電所のような方で、そしてあれだけのお芝居ができるいい男で、素晴らしい俳優であったと思います。そんなことで私のパートはこれでお開きとさせていただきます。どうもありがとうございます。

(2023年9月23日、京都芸術大学 京都芸術劇場 春秋座にて)